宿泊保育の取り組みから

山路　純子

一　はじめに

日々繰り広げられる園内の生活から、子どもたちの関心を園外に向け、地域や自然環境に直接触れさせていく機会として「遠足(園外保育)」があります。

近くの公園、施設、田畑などに散歩に出ることで、子どもたちは思いもかけない出合いや発見をし、また地域に生活する人々と様々なかかわりをしながら自分の世界を広げていきます。幼児期に子どもたちが環境とかかわる体験をしていくことは、その後の生きる力（自分で考え、判断し、行動していく力）に大きな影響を及ぼすと言われています。その意味からも、子どもたちには幅広い多様な体験を重ねていく機会をつくっていくことが望まれます。

子どもたちの生活環境を補完する必要を感じた時には、園外に出て体験を増やすような努力をし、少し足をのばすことで豊かな環境にも出合えることを認識しておくことが大切です。

また保護者にも協力を得て、地域環境に関する情報を収集するようにし、「散歩マップ」を作成し、所要時間・交通状況・危険箇所等を確認し、いつでも園外保育に活かせるようにしておきます。

子どもたちにとっての遠足（園外保育）は、日々繰り返される生活に、変化や潤いをもたらすものであり、その時期が訪れると行事として同じように繰り返し実施されています。

私たちも、遠足を定例行事として、ある意味では毎年当たり前の行事として捉え、取り組んできたのですが、園舎の新築に伴い、子どもの生活環境が著しく変化したことから、改めて園外保育の大切さを考えさせられ、遠足のあり方の見直しを行いました。以下、その経験を通して生まれた宿泊保育を中心に話を進めていきたいと思います。

一学期の半ばが過ぎようとした頃に、園舎新築の話が飛び込んできました。そのために、子どもたちの生活は大幅な変更を余儀なくされたのです。九月から翌年の三月までの間、小学校の空き教室に仮住まいをすることになりました。限られた狭い環境の中で生活することになった子どもたちは、思うように遊ぶこともできず、かろうじて校庭の隅と裏の土手が活動の場となりました。この年ばかりは、子どもたちに少しでも豊かな体験をさせるために何とかしなければという強い思いから、まず、秋の遠足（園外保育）を見直すことになりました。特に新園舎での生活ができない年長児のために、思い出となる「宿泊保育」を実施できないものか検討することにしました。未知数の思い切った取り組みでしたが、必要に迫られていたこともあって、保育者の間で意欲的に検討が進められました。

二　「宿泊保育」の実施に向けて

例年、春と秋の二回、観光バスで「森林公園」「自然博物館」などに遠足に出掛けていました。事前に入念な下見を行いますが、行き先に大きな変更

がなければ、ほとんど昨年の実施計画を参考にして進めています。安全性の確保を最優先に、スケジュールはいつのまにか保育者のイメージで組み立てられていたことに、あまり疑問を感じることはありませんでした。

ところが、新たな取り組みについて検討を始めたことから、子どもたちにとってどうであるべきかという原点に立って考えていくなかで、今まで置き忘れていたことに改めて気付かされました。

引越の作業の合間をぬって、夏休みのほとんどを費やして地域の環境と施設などの状況の調査に歩きました。

◇施設の条件

年長児六十四名の子どもたちが、親から離れた場所で安心して宿泊ができるには、まず、安全の条件を満たさなければなりません。その施設は一階と二階が吹き抜けになっていて見通しがよく、また一団体のみを受け入れるという体制なので、無理なく生活を組み立てることができると判断しました。その他の設備も、子どもの集団にも扱いやすく整っていました。

◇「宿泊保育」の目的

子どもたちの生活を振り返り、その中から宿泊保育につなげていけるものを探っていくことにしました。単なるお楽しみ保育にはしたくなかったからです。

その頃、子どもたちの間ではトトロのことが話題になっていました。「どこに住んでいるのかな」「会いたいね」「遠くに行かなければだめかな」などと、木を見上げながら話をしていました。保育者の方から「トトロに会いに行こうよ」と投げかけ、子どもたちの夢につきあっていくことにしました。

子どもたちと話し合っているうちに、保育者の方

も想像を巡らすと期待感が膨らみ、わくわくし、いろいろなイメージがわいてきました。

◇時期

多くの場合、宿泊保育は夏休みに実施されますが、年長児の心身の発達から考えると、運動会を終えた涼風の立つ九月下旬～十月初旬が適当であると考えています。運動会を体験すると、子どもたちの体力がめきめきついてきて逞しくなること、また、年長児同士で相談や協力をしながら、自分たちの手で運動会をつくり上げてきた経験が自信となり、心の成長が認められるからです。

しかし、大きな行事が短い期間に続くことになるので、生活の流れを調整しながら位置づけるように配慮する必要があります。

◇子どもたちの実態を捉える

実施するに当たって、子どもたちの心の状態にも十分に注意することにします。宿泊は子どもたちにとっては未知の体験であり、不安感もそれぞれに抱いているはずです。宿泊保育を通して何を育てていくかを明確にし、保護者への説明も丁寧に行いました。更に必要に応じて個別に話し合う場をもち、対応をしていきました。

アンケートを実施し、計画に反映させて準備をしていきました。

・お泊まりを一人でしたことがあるか
・夜のトイレに、起こしているか
・就寝時間、起床時間は
・食べ物の好き嫌いはあるか
・アレルギーはあるか
・その他の心配事は　など

たとえば、ある母親から「おもらしをするかもしれないから、予備のパジャマを用意した方がいいでしょうか」という質問に対して、失敗するかもしれないという暗示を与えてしまうことも考えられるので、傷つかないような対応を具体的に伝えて安心してもらうようにしました。

いろいろな情報をもとに、時間を追って一覧表を作成し、保育者全員で共通理解をして、対応をしていくようにしました。

三・四歳児の保育者も、学級の子どもたちを降園させた後に宿舎に合流し、全員で子どもたちにかかわれるようにしました。

三　トトロとの出会い

子どもたちはトトロから届いた手紙を読んで、会えることを楽しみに出掛けました。

宿泊地の周囲の環境は、トトロの住んでいるような森に囲まれ、近くに川も流れています。対岸を走る電車は「ネコバス」のように見え、浮かび上がる民家の灯りはトトロの住みかのように思われます。子どもたちも、次第にトトロの世界に引き込まれていきました。

夕焼けに包まれた山を眺めながら宿舎に入り、かまどに薪をくべてカレーを作りました。夕食を終え、夜の帳（とばり）に包まれる頃、「夜の散歩」に子どもたちを誘いました。体を寄せ合って歩きながら、トトロを探し、声を聞き、肩をトントンされたような感覚を体験しました。布団に入ってからも、「もしかして来るかもしれないよ」「窓を少し開けておこう」などと言いながら眠りにつきました。

子どもたちの起きた時の様子を思い浮かべながら、夜の見回りの合間に採ってきた大きな葉にトトロからの手紙を書いて準備しました。

……みんなにあいたかったけど、ちょっとはずかしかったから、まどからのぞいただけで、おこさないでかえったよ。いつまでもともだちだよ。おみやげをもってきたよ。こんど、あそびにいくね……

山の朝は清々しく、友達と一緒に宿泊ができたことは、子どもたちには大きな自信となったようでした。朝食前の散歩で、子どもたちはトトロからの手

紙を見つけ、「やっぱり、来てくれたよ」「トトロは本当にいたんだね」「会いたかったなあ」と言い、甘栗のたくさん入った包みをみんなで開けました。

四　おわりに（保育者が学んだこと）

「園外保育」に宿泊を加えた時、改めて、子どもたちの心身の発達をどのように受け止めていくか、子どもたちとその時をどのように共有していくかを深く考える機会をもつことができました。

なによりも保育者自身が、活動を創り出していくことに新鮮な喜びを感じ、今まで忘れがちな感覚が戻ってきたように感じました。

その後、宿泊保育のトトロは次の年の子どもたちの心に引き継がれて、少しずつ見直されながら十年の年月が経過してきています。

ところが、あれほどにどきどきし、わくわくした感覚が薄れ、いつしか計画ありきで、同じようなやり方でいともスムーズに実施するようになっていることに再び気付かされたのです。期日やメンバーを入れ替えただけの計画表を作成し、「昨年もやったことだから……」と惰性で実施していることに、なんら疑問を感じなくなっていたのです。保育者には新たな体験を創り出そうとする意欲や感動が薄れてしまっていたことを反省しました。

園外保育の多くは、園の行事に定着し、「なぜ」「どのように」という根本的な見直しを図りにくいものです。それは、季節や乗り物の手配、他の行事との調整などからのしばりを強く受けていることが理由のひとつです。

たまたま園舎新築によって生活環境が大幅に制約されたことから、遠足のあり方について子どもの側から全面的に検討する場をもつことになり、惰性に甘んじてしまうことなく、子どもと共に創り出していく（わくわく、どきどき感のある）ものとして、見直しを図っていくことの大切さを再確認いたしました。

（常盤短期大学）